介護福祉士養成課程でアクティブラーニングを取り入れることの意義
―介護代替実習Ⅰでの陶芸活動における実習日誌を基に―

桑迫 信子

Significance of incorporating Active learning in the Care worker training course : Based on the practice records of Pottery activities in Care worker Alternative Practice I

Nobuko KUWASAKO

1. はじめに

総務省統計調査（2022）によると、65 歳以上の高齢者（以後、高齢者とする）人口は 3,627 万人（前年 3,621 万人）で、高齢化率 29.1%（前年 28.8%）と報告された [1)]。更に、第２次ベビーブーム世代（1971 年～1974 年）が高齢者となる 2040 年には 35.3%と推計され、その 2 年後が増加のピークとされている [2)]。いっぽう高齢社会白書（2022）では、高齢者の中でも前期高齢者（65～74 歳）は心身の健康が保たれ活発な社会活動を可能とする人が大多数を占めるとし、特に他者との交流やスポーツ及び趣味活動をしている人は、より生きがいを感じていることが示された [3)]。1970（昭和 45）年以降、超短期間で高齢社会を迎えた我が国であるが [4)]、医療福祉の発展やヘルスプロモーション活動及び多様な余暇活動により 65 歳以上を高齢者とする一般的な概念はもはや現実的ではなくなりつつある。

このように、幅広い経験や価値観をもつ高齢者が要介護状態を迎える時を見据え、地域共生社会で必要とされる介護福祉士を育てることは養成教育の役割であり社会的使命である。とはいえ、宮崎県内の 2022（令和 4）年度における介護福祉士養成施設への入学定員充足率は 32.2%（前年度 46.7%）と減少の一途をたどっている [5)]。目指す介護福祉士像として、国際生活機能分類（ICF：International Classification of Functioning, Disability and Health）に基づく全人的理解及び自立に向けた質の高い生活支援ができる専門職を養成すると同時に、教育方法をより一層工夫することで個々の学習 *満足度を引き上げ、学習者をモデリング資源とすることも魅力発信の一助と考える。

そこで、介護実習が学内代替となった機を前向きに捉え、代替プログラムに数々のアクティブラーニングを取り入れた。この学習技法は、現代社会の高度情報化、グローバル化、価値観の多様化、

* 文中の「学習」は知識や技術を学ぶこと、「学修」は一定の課程に従い知識や技術を修得することとして使い分ける。

人工知能の進化等へ対応する文部科学省の教育指針に基づくものであり、介護代替実習Ⅰ（以下、代替実習とする）において能動的且つ対話的な学びの過程により、課題解決能力や創造力が養われることを期待した。また、専門科目の履修が始まったばかりの学習進度に加え基礎実習の位置づけである代替実習では、介護学への興味関心を高める必要があった。そこで、事前指導を丁寧に行い本来の実習目標を見失なわないようにすることと、見慣れた学習環境下でも、ある程度の緊張感を保てるよう留意した。

この代替実習における学生の学びを振り返り分析することで、介護福祉教育への示唆を得ることとする。

2. 研究目的

本研究の目的は、介護福祉士養成課程にアクティブラーニングの教育効果を提言し、介護福祉教育の活性化に寄与することである。

3. アクティブラーニングの言葉の定義

アクティブラーニングは、中央教育審議会答申（2012）[6）7）]の中で「教員による一方向的な講義形式の教育とは異なり、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法の総称」と定義されている。そして、能動的な学習について溝上（2014）[8）]は、「書く・話す・発表するなどの活動への関与と、そこで生じる認知プロセスの外化を伴う」と示している。

これらを基に、本研究におけるアクティブラーニングを「知識と技術力向上のための活動（書く・対話する・発表するなど）への学習者の能動的関与と認知の統合を図る学習技法」と定義する。

4. 研究対象者の特性

研究対象は、保育士養成課程の短期大学を母体とする専攻科に在籍し、介護福祉士養成 1 年課程の学生である。入学条件である保育士資格以外にも、全員が社会福祉主事任用資格及び幼稚園教諭二種免許を有している。加えて、音楽療法士（2 種）を選択取得している者もいる。全て宮崎県内在住及び他県出身でも県内に親族の居る 20 歳代で、男女比が 1 対 4 である。予備調査として、高齢者との交流頻度について最も身近な祖父母を対象に調べた結果、全員が「1 年間に数回会う」程度で、高齢者施設の認知度としては、半数が直接訪問した経験があった（表 1)。また、学修者の学びの傾向を知るために、過去 5 年分（2017 年度～2021 年度）の修了研究タイトルを用い、安（2014）[9)]の報告した「介護福祉士の専門性の 8 つの構成要素」に沿って分類した。まず、タイトルを単語として処理し、抽出された 320 単語を累積分類した。その結果、高齢者への「生きがい支援」が最も多いという特徴が表れた（図 1-1)。また、テキストマイニング『KH Coder』にて複合語処理を施し抽出語の出現数を分析した結果、頻出したのは「余暇活動」であった（図 1-2)。

この介護福祉士養成 1 年課程は、全国の養成施設において約 6%と最も少ない[10)]。規程カリキュラムは領域「人間と社会」「介護」「こころとからだのしくみ」「医療的ケア」の総計 1,205 時間以上で、そのうち介護実習が 210 時間である[11)]。また、実習に向けた実習指導者会議を 4 月に開催している（表 2)。

表 1. 高齢者との交流経験等の調査

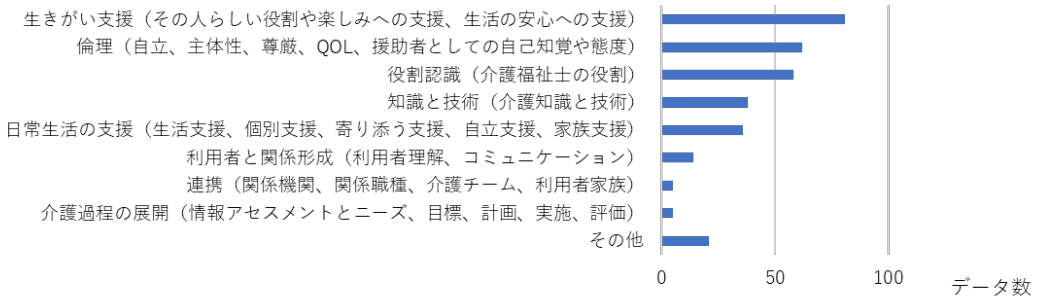
1.あなたと祖父母(65 歳以上)との生活上の関係で最も近いものを選んでください　n=10

	合計
1.同一世帯で、1年以上暮らした経験がある	3
2.近くで暮らし、一部の生活を共にした経験があ	2
3.近くで暮らし、度々訪問した経験がある	1
4.近くで暮らさず、年に数回訪問した経験がある	4
5.身近におらず、生活を共にした経験はない	0

2.高齢者の生活の場である施設(通所介護を含む)に訪問したあなたの経験について最も近いものを選んでください　n=10

	合計
1.直接、生活を見たことがある	5
2.直接、生活を見たことはない	5

過去5年間（2017～2021年度）の「修了研究タイトル」からみた学修者の学びの傾向　n=125



安(2014)「介護福祉士の専門性の構成要素の抽出-介護福祉士養成施設の介護教員の自由記述の内容分析に基づいて-」(表 3『「専門性」に関する構成要素の抽出』より 8 つのカテゴリー)参照　筆者一部改変

図 1-1. 過去 5 年間(2017～2021 年度)の「修了研究タイトル」からみた学修者の学びの傾向

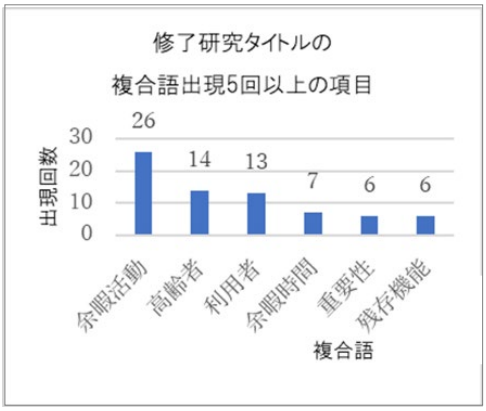


図 1-2. 修了研究タイトルの複合語出現 5 回以上の項目

表 2. 実習時期と主な実習内容

実習	実習時期(期間)	主な実習内容
介護実習Ⅰ	5 月　(5 日)	高齢者施設の概要と環境及びそこでの生活を学ぶ 介護福祉士の役割と多職種協働の意義を学ぶ 高齢者の特徴に合わせたコミュニケーションができる
介護実習Ⅱ―1	6 月～7 月 (13 日)	受け持ち利用者の情報収集ができ情報の意味を学ぶ
介護実習Ⅱ―2	8 月～9 月 (13 日)	受け持ち利用者の介護過程の展開ができその意義を学ぶ
介護実習Ⅰ	10 月　(5 日)	在宅高齢者の生活環境と地域における介護の役割を学ぶ

5.介護実習Ⅰの学内代替実習への変更

世界的流行に陥った新興感染症により、2020（令和 2）年以降医療機関や福祉施設は外部との交流制限を継続している。2022（令和 4）年 5 月の介護実習Ⅰにもその影響が及び、厚生労働省から 2019（令和元）年 2 月及び 6 月に出された事務連絡「実習と同等の内容を各養成校で準備すること」[12)13)]に準拠し、緊急時の教育体制[14)]を整えた。それと同時に、アクティブラーニングを取り入れた代替プログラムの検討と、実習関連施設への ICT（情報通信技術：Information and Communication Technology）活用による教育連携の協力を要請した。内容を以下に示す（表 3）。

表 3.　介護実習Ⅰの実習目的並びに代替実習目標と代替プログラム

＜介護実習Ⅰ　実習目的＞		
利用者の暮らしや住まい等の日常生活の理解や多様な介護サービスの理解ができる ・さまざまな介護サービスと介護生活の場（環境）を知る ・利用者を中心としたコミュニケーションの実践ができる ・介護福祉士の役割と多職種協働の実践を学ぶ		
＜代替実習目標と代替プログラム＞		【実習形式】
目標	（1）施設や関係機関の概要及び固有の特色（環境）について理解する	
①施設の種類と特徴について調べる		【個人及びグループ協同学習】
②施設の特徴や介護サービス及び高齢者の生活環境などについて知る		【オンライン講話】
目標	（2）利用者・家族とのコミュニケーションをとおして、利用者を理解する	
①さまざまなコミュニケーション障がいとその支援方法を理解する		【手話講座】
②コミュニケーションの意義と介護福祉士の役割を理解する		【オンライン講話】
③高齢者の生活や施設生活での活動を知る		【音楽療法・陶芸・ハンドセラピー講座】
目標	（3）日常の生活支援の場面を見学し、介護福祉士の役割を知る	
①高齢者事例を基に、生活支援としての働きかけを考える		【ロールプレイ演習、グループ協同学習】
②①を受け、感染症予防の必要性を理解する		【ロールプレイ演習、グループ協同学習】
③介護福祉職の業務内容を知る		【オンライン講話】
目標	（4）多様な介護サービスと多職種協働について現場実践を通して学ぶ	
①介護福祉士や多職種について調べ、連携の意義について学ぶ		【個人及びグループ協同学習】
②介護サービスについて調べ、社会のしくみについて理解する		【グループ協同学習、オンライン講話】
③多職種連携の実際について知る		【オンライン講話】
目標	（5）認知症に関する基礎知識について学ぶ	
①認知症の特徴を調べ、行動に関する疑問や生活の困りごとを理解する		【個人学習】
②認知症支援のありかたについて知る		【ゲストティーチャー】
③認知症高齢者の支援について知る		【オンライン講話】

6.研究の種類

母集団 10 名の、実習記録並びに質問紙を用いた質的研究である。

6.1 研究方法と調査内容

多くの実習記録の中から、特に学習成果物があり実習目標と乖離しかねない「介護支援の工夫（陶芸）」に焦点を当て、全員の記録内容をデータ化した。加えて、代替実習での学習意欲と学習満足度を把握する為、実習終了後に全プログラムに関するアンケート調査を行った（表 4）。調査内容は、「1.実習内容と実習形式」に関する 10 項目と「2.各プログラムの学習満足度」に関する 10

項目についてリッカート尺度を用いた５段階評価で、「3.代替実習で希望する学習内容」1 項目を任意自由記述とした。回収率は 100%で、無効なデータはなかった。

表 4.　介護実習Ⅰの代替実習終了後のアンケート調査

『介護実習Ⅰ（学内代替）』に関するアンケート調査 以下の質問について最も近いものを選んでください。	
①非常にそうである　②ややそうである　③どちらとも言えない ④あまりそうでない　⑤全くそうでない	①非常に満足　②満足　③どちらともいえない　④やや不満 ⑤不満
1.実習内容と実習形式に関する質問にお答えください 1)高齢者施設の地域での役割やそこで働く人達に興味･関心がある 2)高齢者と直接話しをすることに興味･関心がある 3)高齢者の生活の様子に興味･関心がある 4)高齢者施設で高齢者の生活を良くする支援方法に興味･関心がある 5)学内代替実習ではなく高齢者施設に行って実習がしたい 6)学内代替実習でも介護実習の目的を達成することができる 7)学内代替実習を終えて介護についての興味･関心が変化した 8)次回も学内代替実習で良いと思う 9)学内代替実習では目的に沿って積極的に取り組むことができた 10)学内代替実習では達成感や更なる目標が見えてきた	2.各プログラムの学習満足度についてお答えください 1)課題にそった調べ学習（施設の種類とその概要、高齢者の特徴） 2)認知症講座 3)高齢者施設関係者による講話（リモート） 4)コミュニケーション技術（手話、マスクの表情を読みとる） 5)介護支援の工夫（ハンドセラピー） 6)介護支援の工夫（音楽療法） 7)介護支援の工夫（陶芸） 8)介護支援の工夫（発表会） 9)実習代替プログラム（学習内容、学習時間、学習量、学習環境） 10)教員の対応（代替実習に関する説明、準備、助言、評価） 3.介護実習が代替になった場合どのような学習内容や対応を希望しますか（任意による自由記述です）

6.2 倫理的配慮

調査開始前に、調査への協力は自由であり調査途中でも離脱可能であること、それによる不利益は発生せず成績とは無関係であること、研究の全過程において個人の特定ができない処理と管理をすること、記録物閲覧に関する同意書並びに回答の提出にて同意の判断とすることなど口頭と文書にて説明した。

尚、本研究は宮崎学園短期大学倫理審査会にて承認を受けている。（承認番号：2022006）

6.3 分析方法

データ化した実習記録の分析には、テキストマイニングを用いた。プログラム「介護支援の工夫（陶芸）」の自由記述内容を＜実施＞と＜考察＞に分類し、『KH Coder』の共起ネットワークを用いて抽出語の関係性を可視化した。前処理として、複合語は語の切り出しを細かくするための茶筅を選択した。加えて、抽出語は最小出現数を 5 回以上とし、描画する共起関係は上位 60 に設定した。対象データは、＜実施＞165 文、＜考察＞94 文であった。また、実習後のアンケートについては、回答を数値化した。

6.3.1「介護支援の工夫（陶芸)」における実習記録＜実施＞、＜考察＞、＜実施＋考察＞の『KH Coder』分析結果

まず、実習記録の＜実施＞に頻出する語を『KH Coder』で抽出し、『クラスター分類』及び『共起ネットワーク・HTML 表示』で分析した。その結果、『クラスター分類』では「陶芸に使う道具及び工程」が多く出現し(図 2-1)、『共起ネットワーク』では 8 のカテゴリーの単純なネットワークが描出された。更に、「陶芸」を中心にした『HTML 表示』にすると、「陶芸への期待や、レクリエーションとしての脳への効果」が描出され、強いネットワークが鮮明になった(図 2-2)。

次に、実習記録の＜考察＞を分析した結果、『クラスター分類』では主に「身体活動と感想」が出現した(図 3-1)。そして、『共起ネットワーク』『HTML 表示』では「土の感触を手や五感で感じる」「粘土に触れ指先を使う体験」と、「高齢者レクリエーション活動」「脳への刺激」が現れ、10 のカテゴリー全体が複雑なネットワークで描出された。また、「陶芸」を中心にし『HTML 表示』でも、同様の繋がりが確認された(図 3-2)。

最後に、実習の全てである＜実施＋考察＞をまとめて『共起ネットワーク』で分析した。その結果、大きく 3 のカテゴリー「創作過程に関する内容」「創作活動での主観」「心身にもたらす影響」に分かれた。最も強いネットワークである「心身にもたらす影響」のカテゴリーでは、「他者とのコミュニケーションで満足を味わい、楽しみながら身体回復や認知の向上効果を期待できる」及び「他者との交流は脳機能を維持する機会」と捉えていた(図 4-1)。更に、「創作」と「感想」の外部変数処理を行ったところ、「陶芸を、手を使ったレクリエーション活動と認識」して取り組んでいたことが分かった(図 4-2)。

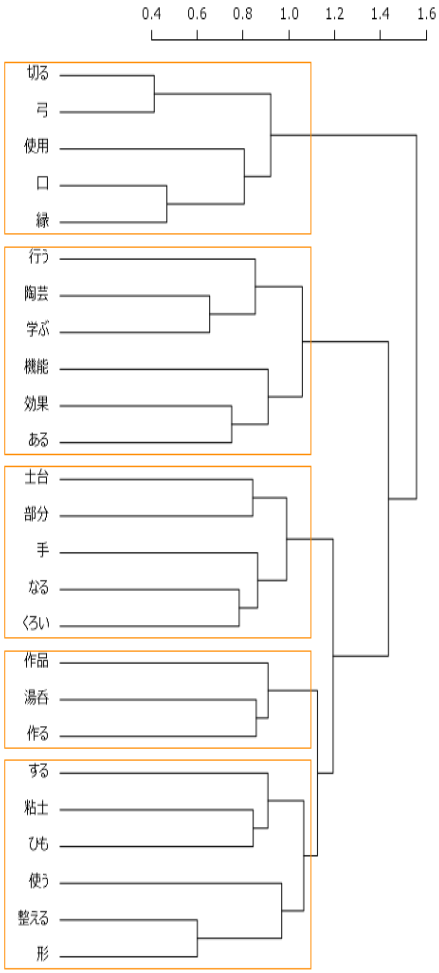


図 2-1. 「介護支援の工夫(陶芸)」
＜実施＞記録の『クラスター分類』

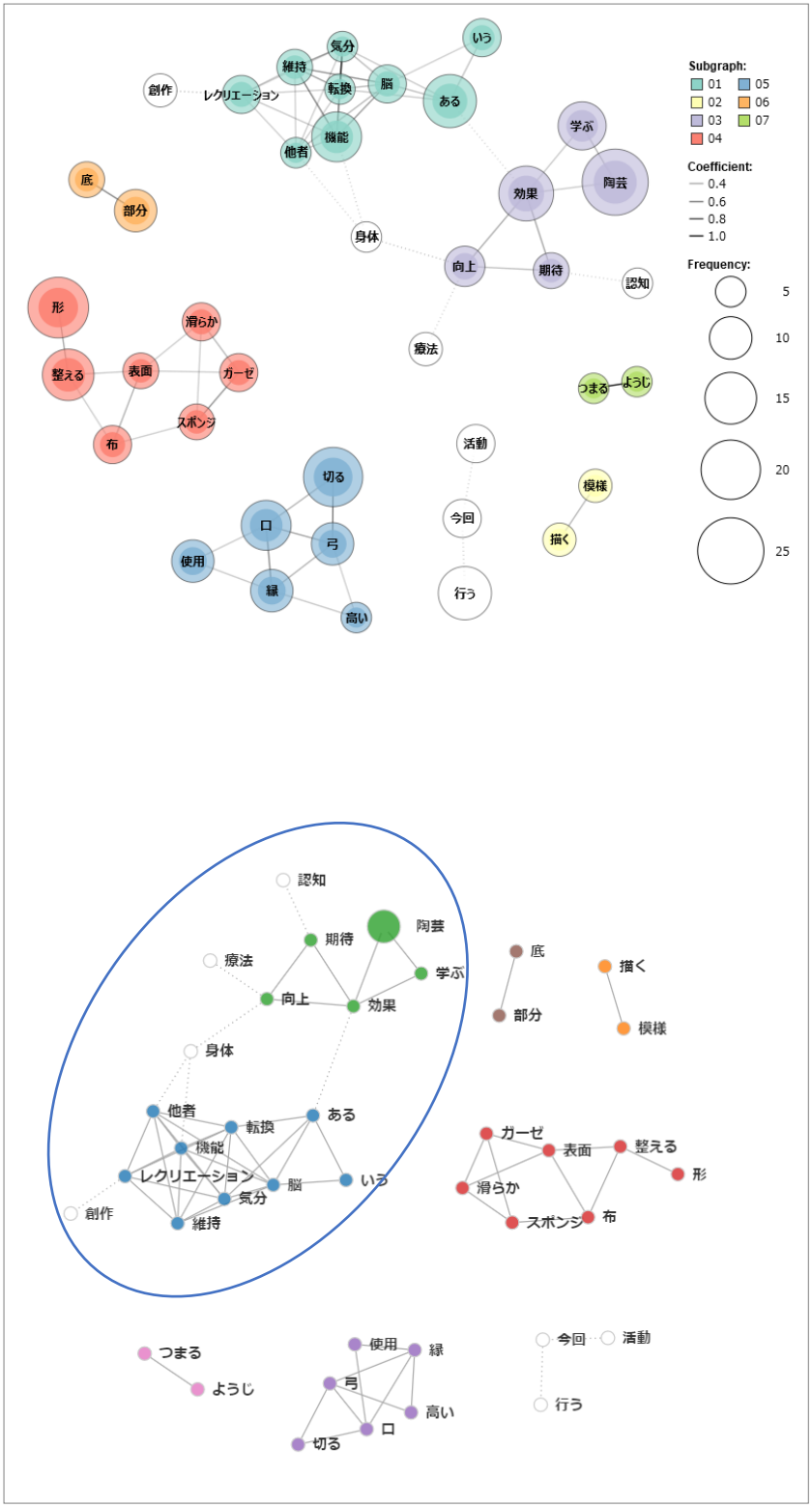


図 2-2. 「介護支援の工夫(陶芸)」＜実施＞記録の
『共起ネットワーク(上)・HTML 表示(下)』分析結果
※「陶芸」を中心とした HTML 表示では、最も複雑なネットワークを
青枠で示した

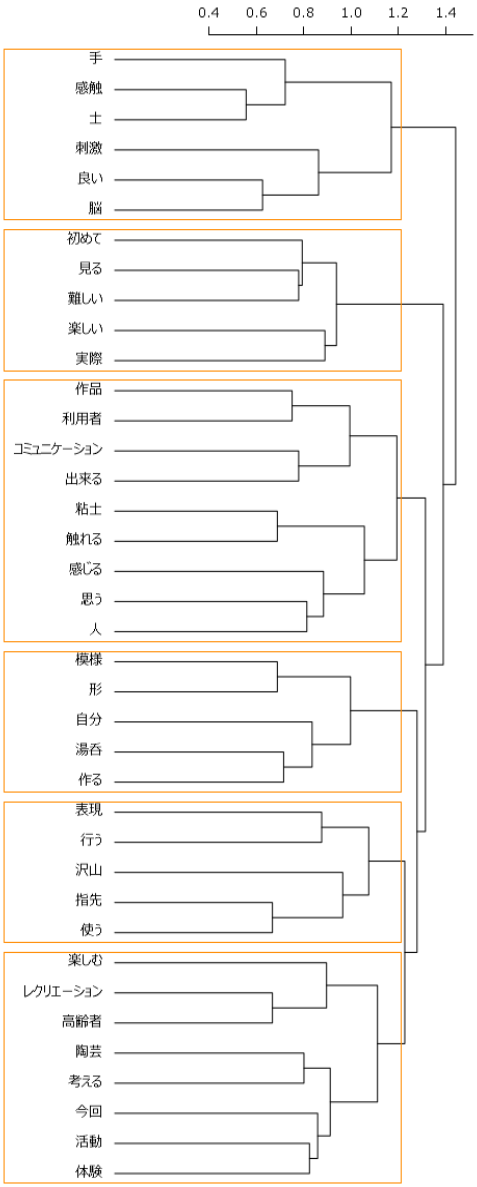


図 3-1. 「介護支援の工夫(陶芸)」＜考察＞記録の『クラスター分類』

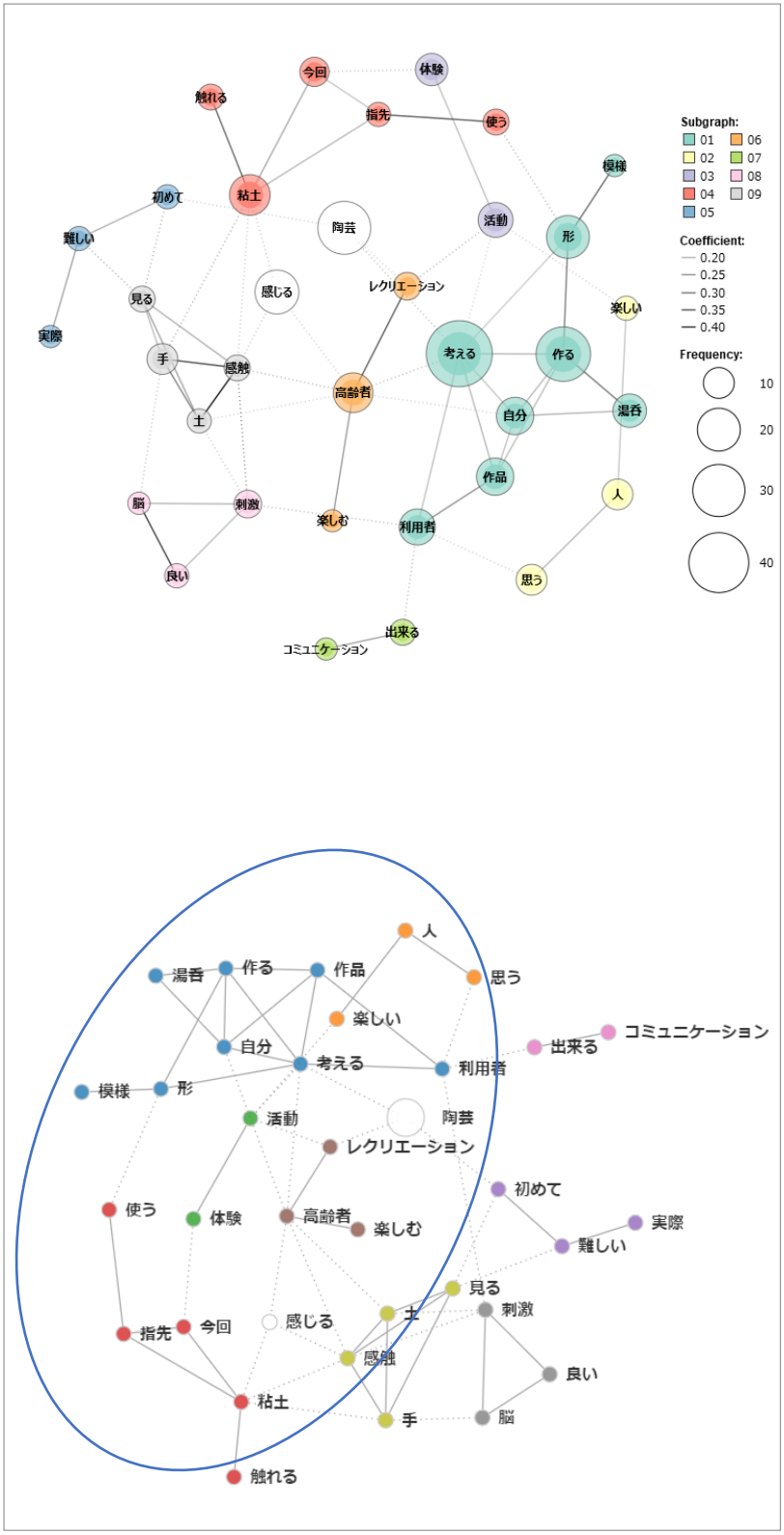


図 3-2. 「介護支援の工夫(陶芸)」＜考察＞記録の『共起ネットワーク(上)・HTML 表示(下)』分析結果
※「陶芸」を中心とした HTML 表示では、最も複雑なネットワークを青枠で示した

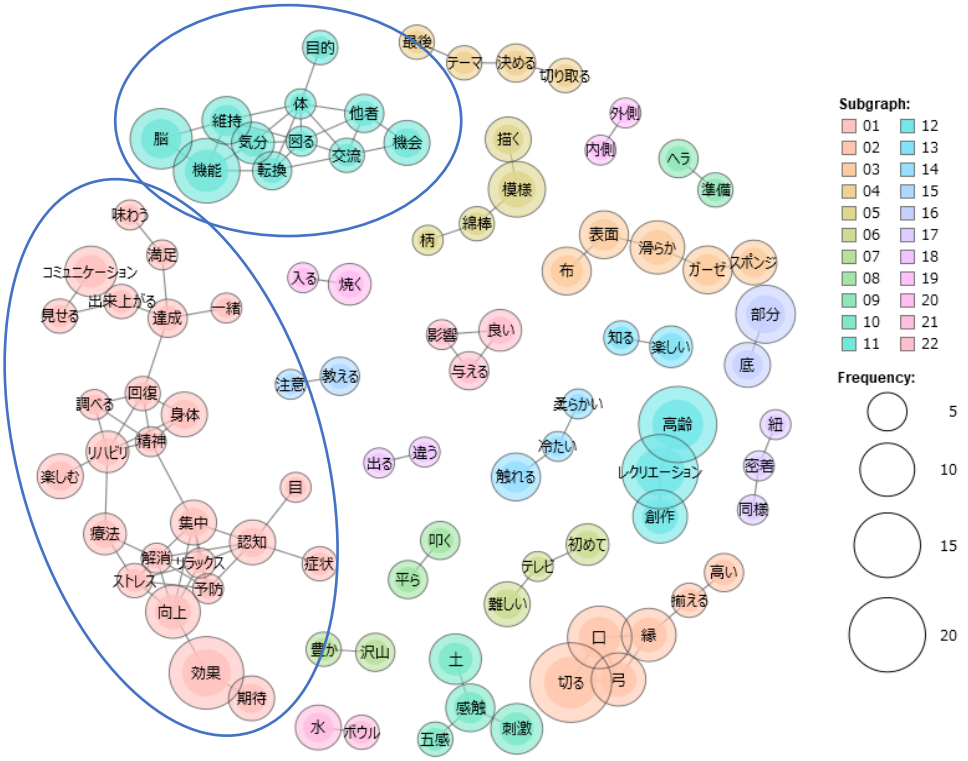


図 4-1.　「介護支援の工夫(陶芸)」<実施＋考察>記録の『共起ネットワーク』分析結果
※最も複雑なネットワークを青枠で示した

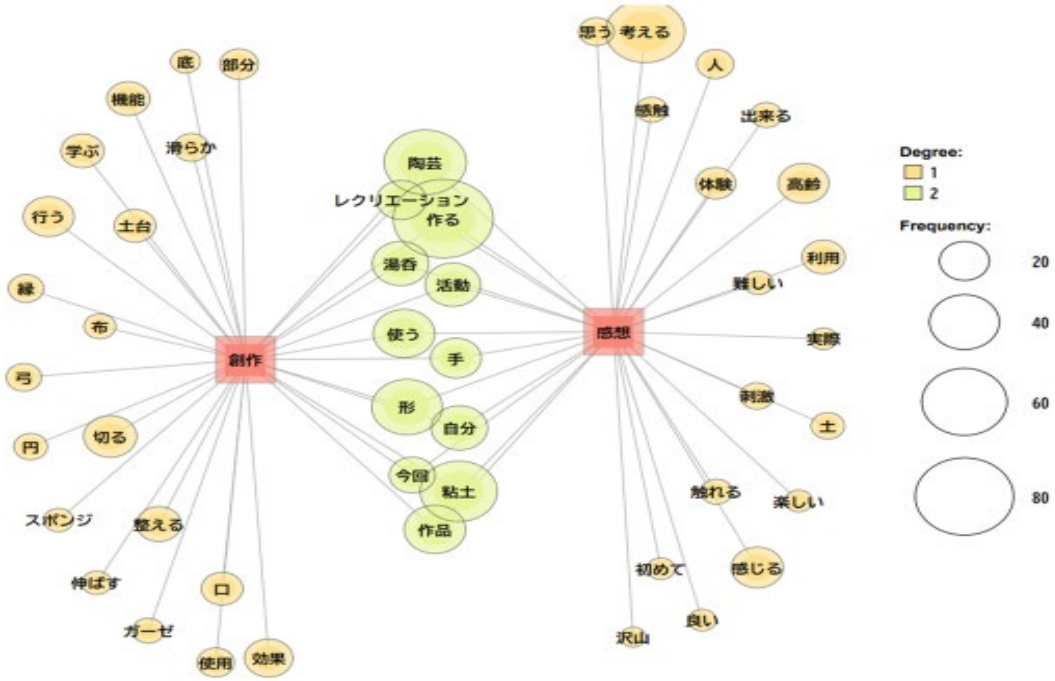


図 4-2.　「介護支援の工夫(陶芸)」<実施＋考察>記録の『共起ネットワーク』に「創作」と「感想」の外部変数処理を行った分析結果

6. 3. 2. アンケート調査の結果

1） 実習内容と実習形式に関係することについて

「1. 高齢者施設の地域での役割やそこで働く人達」「2. 高齢者と直接話しをすること」「3. 高齢者の生活の様子」「4. 高齢者施設で高齢者の暮らしを良くする支援方法」に対して、60～70%の学生は興味や関心をもっていると答えた。しかし、約 20%の学生はどちらとも言えない、10%が高齢者の生活の様子にあまり関心はないと回答した。次に、実習形式では「5. 学内代替ではなく高齢者施設に行って実習がしたい」と思っている学生が 30%いるのに対して、どちらとも言えない、あまり行きたくないと思っている学生が 70%いた。そして、「6. 代替実習でも介護実習の目的を達成することができる」と回答した学生が 60%、どちらとも言えない、あまり達成することはできないと思っている学生が 40%いた。また、「7. 代替実習を終えて介護についての興味・関心が変化した」学生は 80%で、残りはどちらとも言えないと回答した。「8. 次回も代替実習で良いと思う」学生は 10%で、どちらとも言えない 50%、本来の実習を望む学生が 40%であった。

最後に、「9. 代替実習では目的に沿って積極的に取り組むことができた」と評価する学生が 80%いた。また、「10. 達成感や更なる目標が見えてきた」学生が 60%いたのに対し、どちらとも言えない、あまりそうでないが合計 40%であった（表 5）。

表 5.　介護実習Ⅰの代替実習終了後のアンケート「1. 実習内容と実習形式に関する質問」についての回答

1.高齢者施設の地域での役割やそこで働く人達に興味・関心がある	合計
非常にそうである	2
ややそうである	5
どちらとも言えない	3
あまりそうでない	0
全くそうでない	0

2. 高齢者と直接話しをすることに興味・関心がある	合計
非常にそうである	3
ややそうである	4
どちらとも言えない	3
あまりそうでない	0
全くそうでない	0

3. 高齢者の生活の様子に興味・関心がある	合計
非常にそうである	3
ややそうである	4
どちらとも言えない	2
あまりそうでない	1
全くそうでない	0

4. 高齢者施設で高齢者の生活を良くする支援方法に興味・関心がある	合計
非常にそうである	2
ややそうである	4
どちらとも言えない	4
あまりそうでない	0
全くそうでない	0

5. 学内代替ではなく高齢者施設に行って実習がしたい	合計
非常にそうである	1
ややそうである	2
どちらとも言えない	5
あまりそうでない	2
全くそうでない	0

6. 学内代替実習でも介護実習の目的を達成することができる	合計
非常にそうである	2
ややそうである	4
どちらとも言えない	3
あまりそうでない	1
全くそうでない	0

7. 学内代替実習を終えて介護についての興味・関心が変化した	合計
非常にそうである	2
ややそうである	6
どちらとも言えない	2
あまりそうでない	0
全くそうでない	0

8. 次回も学内代替実習で良いと思う	合計
非常にそうである	0
ややそうである	1
どちらとも言えない	5
あまりそうでない	4
全くそうでない	0

9. 学内代替実習では目的に沿って積極的に取り組むことができた	合計
非常にそうである	0
ややそうである	8
どちらとも言えない	2
あまりそうでない	0
全くそうでない	0

10.学内代替実習で達成感や更なる目標がみえてきた	合計
非常にそうである	2
ややそうである	4
どちらとも言えない	2
あまりそうでない	2
全くそうでない	0

2）各プログラムの学習満足度について

アクティブラーニングを取り入れたプログラムの全項目において、ほぼ 80%以上が満足と回答した。しかし、「課題に沿った調べ学習」「実習代替プログラム（学習内容、学習時間、学習量、学習環境）」と「介護支援の工夫（発表会、音楽療法）」においては、10～20%がどちらとも言えないと回答した（表 6）。

表 6.　介護実習Ⅰの代替実習終了後のアンケート「2. 各プログラムの学習満足度」に関する質問への回答

1. 課題にそった調べ学習（施設の種類とその概要、高齢者の特徴）	合計
非常に満足	2
満足	6
どちらとも言えない	2
やや不満	0
不満	0

2. 認知症サポーター講座	合計
非常に満足	2
満足	8
どちらとも言えない	0
やや不満	0
不満	0

3. 高齢者施設関係者によるリモート講座	合計
非常に満足	7
満足	3
どちらとも言えない	0
やや不満	0
不満	0

4. コミュニケーション技術（手話、マスクでのコミュニケーション）	合計
非常に満足	6
満足	4
どちらとも言えない	0
やや不満	0
不満	0

5. 介護支援の工夫（ハンドセラピー ）	合計
非常に満足	7
満足	3
どちらとも言えない	0
やや不満	0
不満	0

6. 介護支援の工夫（音楽療法）	合計
非常に満足	6
満足	3
どちらとも言えない	1
やや不満	0
不満	0

7. 介護支援の工夫（陶芸）	合計
非常に満足	9
満足	1
どちらとも言えない	0
やや不満	0
不満	0

8. 介護支援の工夫（発表会）	合計
非常に満足	2
満足	6
どちらとも言えない	2
やや不満	0
不満	0

9. 実習代替プログラム（学習内容、学習時間、学習量、学習環境）	合計
非常に満足	3
満足	6
どちらとも言えない	1
やや不満	0
不満	0

10. 教員の対応（代替実習に関する説明、準備、助言、評価）	合計
非常に満足	6
満足	4
どちらとも言えない	0
やや不満	0
不満	0

3）介護代替実習で希望する学習内容や対応について

普段の講義とは異なり、より具体的で体験を交えた学習を望む回答が多かった（表 7）。

表 7.　介護実習Ⅰの代替実習終了後のアンケート「3. 介護代替実習で希望する学習内容等（自由記述）」に関する回答（筆者による類似内容の統合）

①調べたことや発表したことについて多職種から助言をもらい対応方法を学びたい	⑥施設の 1 日の流れと介護福祉士の動きを学びたい
②聞いて考えるスタイルよりも体験や意見交換を沢山したい	⑦介護福祉士に色々な質問がしたい
③具体的事例を基に対応策などを学友と考えたい	⑧手話・陶芸・ハンドセラピー等の体験は記憶に残る体験で良かった
④レクリエーション体験（利用者役と介護者役）が沢山したい	⑨普段の講義や演習よりも深く丁寧に学びたい
⑤普段の講義や演習とは違う特別な体験型学習がしたい	

７. 考察

介護福祉教育における学習満足度の向上と活性化を目指し、教育方法の示唆を得るために研究に着手した。得られた分析結果と文献を基に、アクティブラーニングの教育効果をまとめ考察を加える。

1）介護支援のイメージ化と経験の内省

「介護支援の工夫（陶芸）」（以下、陶芸とする）での学習のねらいは、シミュレーションにより利用者と介護者に立場を変換させイメージ化を図りながら学ぶことであった。このシミュレーションは、「経験学習理論」を基盤とするアクティブラーニング学習技法のひとつで、経験の内省過程が学習構成要素の一部となっている[15)]。そして、これらのイメージ化と内省は、利用者のニーズ把握や支援の留意点に繋がり、介護者役としての行動を丁寧に顧みることで考えを深められる。陶芸の実習記録を分析した結果、一連の経験を学びとして整理できており実習目標の達成を確認できた。併せて活動中は、互いの作業確認や褒めあう場面を多く目にした。この受容や承認は施設介護にも通じることであり、満足度の高い生活支援の土台となる。介護福祉教育においては、コミュニケーション力を養い豊かな創造力でサービスを提供できる人材の育成が求められている。思考力や判断力は勿論のこと、学生が相互の多様性を認め尊重する関係性の中で倫理観も育まれるものと考える。時に、複数の人員構成でアクティブラーニングが成立する場合、負の関係が学習満足度に影響することも考えられる。基礎学力やリーダー性など全体のバランスを配慮し、エンパワメントできる学習環境への介入が必要である。

2）協同力と自己マネジメント力の育成

代替実習プログラム全般において、実習目標の達成を目指した円滑な運営となった。学生が先を見据え集団で計画的に行動するということは、協力体制や役割意識など協同力の育成に有効で、聞く力や考える力を基盤とする自己マネジメント力の向上にも期待することができた。学生に行った節目ごとの「説明と確認」は、信頼関係の根幹をなすだけではなくマネジメントの修正に役立ったのかもしれない。留意点としては、全体に埋もれてしまいがちな少数派に気づくことである。アンケートの結果によると、「調べ学習／発表会／音楽療法」を苦手とする回答があった。特に高次のアクティブラーニング †では、集団での活動的な学習環境を意図的に作り出している為、過度のストレスを感じていないかを観察し、ピアインストラクションを用いるなど適宜適切な学習支援も必要である。状況に応じて個人の不利益にならぬよう指導すると共に、学生の成長を評価し称賛を心がけたい。

3）経験の概念化と学習満足度

陶芸の実習記録には、「*わずかな残存能力でも楽しめる余暇活動*」「*作った湯のみで お茶を飲むことが楽しみになり脱水予防につながる*」「*自然な指先のリハビリ*」など、生活支援での活用イメージを膨らませた内容が多数あった。これは、構成要素である学習環境や対話から、シミュレーションの学習サイクル ‡が機能していたことを裏付けるものである。そこで、陶芸の学習過程を振り返ってみると、代替実習プログラムを学生に提示した段階から「*やったことがある*」「*面白そう*」などと語り、それぞれにエピソードを想起していた。このエピソードは、学生がこれまで実際に見

† 高次のアクティブラーニングには、協同学習・調べ学習・ディベート・ピアインストラクションなどがある。
‡ シミュレーションとは、①具体的経験②内省的観察③抽象的概念化④能動的経験の学習サイクルをもつ学習方法。

たり聞いたり触れたりした「直接的生活経験」とそれ以外の「間接的生活経験」として、学習への影響を与えたものと考える。活動当日は、導入としての説明後に「湯のみ」作成をとおして基本手順を学んだ。そこでは、「冷たい・軟らかい」感覚や「こねる・形作る」動作に必要な身体機能を意識するだけではなく、「生活道具」としてのイメージ化を図っていた。また、指導内容に対して「*…と先生が話され、何事にも積極的になろうと思った*」「*先生から褒められて気分がよかった。自分も利用者にそうしたい*」など、声の調子や湧きおこった感情なども含め、全ての経験を概念化し成長しようとしていた。そして、これらは既習内容に留まらず未習内容のリハビリテーションなどにまで発展させているところが興味深かった。アンケートにおいて今後の代替実習でも体験活動を希望する内容が多かったのは、アクティブラーニングを用いた学習技法への満足度の表れとして評価したい。

4）講義・演習・実習とアクティブラーニング

介護福祉士養成課程のカリキュラムでは、科目間の関連性と順次性を考慮した弾力的な学習方法（講義・演習・実習）の構築が求められている。そこで、それぞれの学習方法とアクティブラーニングについて整理する。まず講義については、科目のねらいや基礎知識を教員主導で行う受動的学習法が中心となる。そして随時、低次のアクティブラーニングである小テストやコメントシートなどから高次のピアインストラクションなどに至る様々な技法を用いて知識を深めることができる。次に、演習は教材研究と計画性を必要とする高次のアクティブラーニングを主とし、専門的実践力の基礎が育まれる。演習終了後に、チェックシートなど低次のアクティブラーニングにて振り返ることでより効果的な学習となる。生活支援などの演習は、学生自身の生活経験を反映させやすく、知識と技術を丁寧に関連づけることができ、更に倫理的判断や他者理解においても重要な学習の機会となる。最後に実習は、アクティブラーニングの極みである。利用者や職員から得られる直接的な経験を実習記録で内省することにより介護過程を体系づけ、これらを段階的に積み重ねることで学問への理解が深まる。このように、全ての学習方法に活用できるアクティブラーニングではあるが、講義・演習・実習の置き換えの限界についても理解する必要がある。看護基礎教育でのシミュレーション教育を推奨する藤野（2021）[16]は、「実習の全てをシミュレーション導入型授業に置き換えることはできない。なぜなら、シミュレーションは実際の経験にはなり得ないからである。（中略）前段階の「準備」、経験後に行う「総括」、もしくは実際に経験できなかったことの「補完」的な役割を担っているに過ぎない」と断言している。介護福祉も、多職種協働で対象者の命と生活を支援する「実践の科学」という点において同義であり、講義・演習・実習の学習効果を最大限に引き出せるよう学習計画には最善を尽くしたい。

5）学習進度とアクティブラーニング

藤村（2021）[17]は、介護福祉士に必要な中核的能力は「問題発見・解決能力」だとし、それらの創造的な思考や行動力は従来の知識注入型一斉授業で育成することは不可能だと明言している。また、介護福祉士養成施設の教員の教育力向上に関する調査報告書にて、「安全指導やコンプライアンス指導などのように、基礎・基本として教師主導で確実に教えるべきこともあり、基礎・基本 2 割とアクティブラーニング 8 割程度の構成が妥当だと言われている」と示した。このような小単元内での構成配分は理解できる一方で、アクティブラーニングの活用について「基礎実習の段階で代替とする場合は、講演など専門の基礎構築に比重を置くべき」と学習進度に対する考えも聞かれた。これについて松下（2016）[18]は、認知プロセスの外化を行う前提として「知識の習得や理解（内化）が不可欠である。講義とアクティブラーニング型授業は対立するものではなく、学修サイクル全体の中で、＜外化と内化＞、あるいは＜知識の習得と知識を用いた高次の思考＞のどちらか

に重きを置いているかの違いであり相補的なものである」と述べている。つまり、アクティブラーニングの活用は、求められる介護福祉士の育成を目指し全教員でシラバスの情報共有と担当科目の授業構成を熟考することにより、学習進度に関係なく効果的で意義ある学習となり得る。

８.まとめ

介護福祉士養成課程でアクティブラーニングの学習技法を用いることにより、①学生の生活経験が内的活動（読む・書く・聞く・感じる・想像する・内省するなど）と外的活動（対話する・表現する・発表するなど）に役立ち、知識が効果的に体系化される。②能動的学習はコミュニケーション力や協同力の素地となり、自己マネジメント力の育成も期待できる。また、③周囲との学習交流により、自尊感情と学習満足度が高まるという教育効果がうまれる。

アクティブラーイングに必要な準備としては、授業の導入段階での学習目標及び学習内容の明確化と、学生の直接的及び間接的生活経験の程度に合わせた興味関心の引き出し、実施段階では知識の統合化を図るための問いである。また、効果的に展開させるために適宜「対話」や「記録」など表出の機会を設け、個人の能力に合わせた成長過程の振り返りができるよう支援する必要がある。

このように、介護福祉士養成課程でアクティブラーニングを活用することにより、各自の経験知を介護実践に反映でき、より主体的で躍動的な学習方法となる。その際教員は、全体を俯瞰しながら安心して学習展開できる環境作りと十分な説明をしなければならない。

以上のことを、介護福祉士養成課程のアクティブラーニングを取り入れた学習者成長モデルを図５に示す。

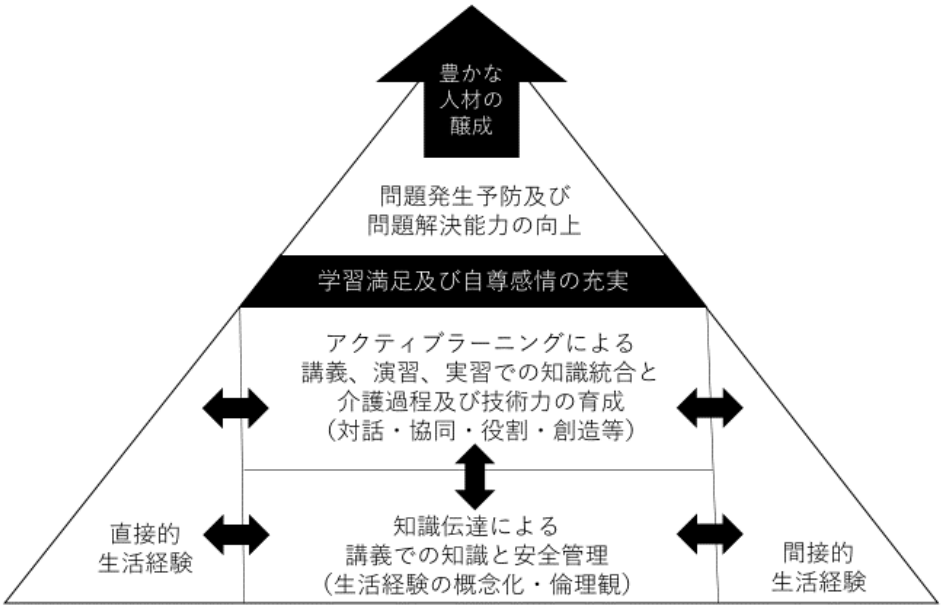


図 5. 介護福祉士養成課程でアクティブラーニングを取り入れた学習者成長モデル

９.おわりに

アクティブラーニングの活用においては、講義との相補関係を見定め学生の能力差により発生するタイムラグにも配慮した時間配分を検討することが課題である。

今後も、学習効果を高める為の教材研究を行うと共に、対話から派生する人間性の醸成にも繋げ

たい。

謝辞

本研究にご協力いただいた専攻科（福祉専攻）の学生、実習施設関係者の皆様並びにお力添えいただいた先生方に感謝いたします。

＜引用・参考文献＞

1）総務省（2022）「高齢者の人口」https://www.stat.go.jp/data/topics/topi1321.html
（閲覧日 2022 年 12 月 26 日）
2）国立社会保障・人口問題研究所（2017）「日本の将来推計人口（平成 29 年度推計）―平成 28（2016）年～平成 77（2065）年」p. 3, https://www.ipss.go.jp/pp-zenkoku/j/zenkoku2017/pp29_gaiyou.pdf
（閲覧日 2022 年 12 月 26 日）
3）内閣府高齢社会白書令和 4 年版（2022）「第 3 節＜特集＞高齢者の日常生活・地域社会への参加に関する調査（概要）https://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2022/zenbun/pdf/1s3s_03.pdf（閲覧日 2022 年 9 月 30 日）
4）内閣府高齢社会白書令和 4 年版（2022）「第 1 章第 1 節 2 高齢化の国際的動向」
p . 8, https://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2022/zenbun/pdf/1s1s_02.pdf（閲覧日 2022 年 12 月 26 日）
5）宮崎県人材確保推進協議会（2022 年 6 月 1 日開催会議資料）「介護職（介護福祉士）養成機関の入学定員充足率及び県内就職率」
6）中央教育審議会答申（2012）「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～」
https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/__icsFiles/afieldfile/2012/10/04/1325048_1.pdf（閲覧日 2022 年 12 月 26 日）
7）中央教育審議会答申（2012）「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～」用語集
p. 37, https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/__icsFiles/afieldfile/2012/10/04/1325048_3.pdf（閲覧日 2022 年 12 月 26 日）
8）溝上慎一（2014）「アクティブラーニングと教授学習パラダイムの転換」東信堂, p. 7.
9）安瓊伊 （2014）「介護福祉士の専門性の構成要素の抽出-介護福祉士養成施設の介護教員の自由記述の内容分析に基づいてー」老年社会科学, 第 35 巻第 4 号, pp. 419-428.
10）公益社団法人日本介護福祉士養成施設協会（2022/09/20）「令和 4 年度介護福祉士養成施設の入学定員充足状況等に関する調査の結果について」https://kaiyokyo.net/news/2022/000861/（閲覧日 2022 年 12 月 26 日）
11）厚生労働省（2018）「介護福祉士養成課程における教育内容の見直し」について
https://www.mhlw.go.jp/content/000345245.pdf（閲覧日 2022 年 9 月 29 日）
12）文部科学省・厚生労働省他事務連絡（令和 2 年 2 月 28 日）「新型コロナウィルス感染症の発生に伴う医療関係職種等の各学校、養成所 及び養成施設等の対応について」
https://www.mhlw.go.jp/content/000603666.pdf（閲覧日 2022 年 9 月 29 日）
13）文部科学省・厚生労働省他事務連絡（令和 2 年 6 月 1 日）「新型コロナウィルス感染症の発生に伴う医療関係職種等の各学校、養成所 及び養成施設等の対応について」
http://jaswe.jp/novel_coronavirus/doc/covid19_kouromonka_jimurenraku_20200601.pdf
（閲覧日 2022 年 9 月 29 日）
14）桑迫信子（2020）「介護実習の代替プログラムにおける学習効果の検証」宮崎学園短期大学紀要第 13 号, pp. 80-87.
15）藤野ユリ子（2021）「看護基礎教育におけるシミュレーション教育の導入」日本看護協会出版会, pp. 14-17.
16）前掲書 15）pp. 31-32.
17）日本介護福祉士養成施設協会（2021）令和 2 年度社会福祉推進事業「介護福祉士養成施設の教員の教育力向上に関する調査研究事業　報告書」藤村裕一，国立大学法人鳴門教育大学 学校教育研究科, pp. 154-155.
https://www.mhlw.go.jp/content/12200000/000791452.pdf（閲覧日 2022 年 12 月 26 日）
18）松下佳代・京都大学高等教育研究開発推進センター編（2016）「ディープ・アクティブラーニング」, 勁草書房, p. 24.